

台湾の大学図書館の再構想
知識インフラから AI によるイノベーションの推進へ
陳昭珍

国立台湾師範大学図書館情報学研究所 名誉教授兼特聘研究員、
中原大学通識教育センター 兼任講座教授

要旨

高等教育は現在、人口構造の変化、財政的圧力、デジタルトランスフォーメーション (DX)、そして生成 AI の急速な発展が複雑に絡み合う構造的な転換期にあります。大学図書館にとって、こうした変化は単なる技術の更新やサービスツールの変更にとどまらず、大学内における図書館の立ち位置や価値そのものに関わる問題です。本稿では、台湾における高等教育と大学図書館の現状を背景に、少子化、情報行動の変化、プラットフォームの集中化、オープンサイエンス、人工知能 (AI)、専門的人材といった要因が大学図書館に及ぼす影響について分析します。

キーワード：大学図書館、生成 AI、知識インフラ、AI リテラシー、研究支援、図書館サービスプラットフォーム、デジタルトランスフォーメーション (DX)

はじめに：

大学の変化に伴う図書館の再定義

大学図書館の発展は、常に高等教育を取り巻く環境と密接に関わってきました。学生の構成、教育手法、研究方法、そして大学

運営のあり方が変化する中で、図書館が従来のような、所蔵資料・貸出・情報検索を中心としたサービスモデルを維持し続けることは不可能です。近年の国際的な専門報告書においても、人工知能 (AI)、オープンサイエンス、研究データ、デジタルスキル、信頼性、そして情報環境の変化といった要素が、学術・研究図書館の業務範囲を再構築しつつあることが指摘されています (ACRL Research Planning and Review Committee, 2023, 2024; IFLA, 2024)。

台湾の高等教育が直面している圧力は、とりわけ構造的なものです。少子化により学生の母集団が長期的に縮小し、授業料収入に大きく依存する一部の私立大学では財政的な逼迫が深刻化しています。同時に、ハイブリッド型学習、生涯学習、柔軟な学習形態の普及が、従来の教育モデルを変容させています。さらに、生成 AI の普及に伴い、カリキュラム設計、学習評価、学術的誠実さ、そして大学運営のあり方といった課題が、大学が新たに取り組むべき核心的な論点となっています。

教育部の最新の学生数予測によれば、高等教育の学生人口は今後も出生数の減少による長期的な影響を受け続ける見通しです。

特定の出生世代の影響で短期的な変動が生じる可能性はあるものの、長期的な縮小傾向は変わりません（教育部統計処、2026）。したがって、図書館は単に「いかにサービスを拡充するか」を問うだけでなく、大学そのものが変容する中で、大学図書館はどうあるべきかについて、さらに深く考察する必要があります。

台湾大学図書館の現状と構造的課題

台湾大学図書館は、極めて充実したリソース基盤を有しています。教育部（日本の文部科学省に相当）の統計によれば、高等教育機関の図書館における紙媒体の蔵書は依然として相当な規模を維持している一方で、電子書籍、電子ジャーナル、データベースが重要な学術情報リソースとなっています。同省の統計では、紙媒体の貸出とオンライン・データベース（電子書籍・電子ジャーナルを含む）の検索数が主要なサービス指標として挙げられており、リソースの利用形態において、すでに紙媒体よりもデジタル利用が上回っている実態が反映されています（教育部統計処、2024）。

台湾大学図書館は長年にわたり、コンソーシアムによる共同購入、図書館間相互貸借（ILL）、文献複写・提供サービス、大学間でのリソース共有などを通じて、重複購入の削減と情報入手の拡大を図ってきました。こうした連携の仕組みは、大学図書館が孤立した個々の機関ではなく、相互に依存し合う知識リソースのネットワークであることを示しています。

しかし、図書館が直面している課題は、単なる蔵書規模の問題を超えたものとなっています。

第一に、人口動態や財政面からの圧力により、学習・研究および機関の目標達成に対して図書館がいかに貢献しているかを、より明確に説明することが求められています。Oakleaf（2010）が早くから指摘しているように、学術図書館の価値評価は、従来の「インプット（投入）」や「アウトプット（産出）」といった指標の枠組みを超え、学生の学習、研究活動、そして機関としての成果との関連性に重点を置く方向へと転換すべきなのです。

次に、利用者が学術情報にアクセスする入り口が変化しています。Google や出版社プラットフォーム、そして生成 AI が、学生や研究者にとって最初の検索の起点となることが一般的になっています。ここに重要なパラドックスが生じています。すなわち、図書館が電子リソースの購入、利用許諾、整理、保存を担っているにもかかわらず、デジタル化が進めば進むほど、かえって図書館そのものが利用者の目に留まりにくくなる可能性があるということです。

第三に、図書館の新たな責務が急速に増大しています。研究データ管理、オープンサイエンス、AI リテラシー、権利とプライバシー、エビデンスの統合、AI の評価といった業務が、学術図書館の専門的領域に組み込まれつつあります。Cox、Kennan、Lyon、Pinfield（2017）による国際的な研究が示すように、学術図書館は研究データ管理に関する提言、方針策定、相談業務に

において重要な役割を担っていますが、専門的スキル、人的リソース、そして部門間連携の確保が依然として大きな課題となっています。

AI 時代における大学図書館の価値とは何か？

生成 AI が数秒で一見完全な回答を生成できる以上、大学図書館の価値を「AI よりも早く答えを提供する」ことだけに求めるわけにはいきません。AI の強みは速度、規模、情報の統合、そして利便性にあります。一方、図書館が持つ代替不可能な専門的価値は、証拠、権利、知識の記憶、サービスの継続性、公平なアクセス、そして専門的な判断にあります。

IFLA（2024）は、「知識の実践の変化」、「AI やその他の技術による社会変容」、「信頼の再構築」、「スキルや能力の複雑化」を、世界の情報・知識環境における重要なトレンドとして挙げています。これらのトレンドは、情報の生成コストが急速に低下する中で、情報源の信頼性、証拠の文脈、そして責任の所在がいっそう重要になっていることを示唆しています。

したがって本稿では、大学図書館の将来像を単なる「もう一つのチャットボット」と位置づけるのではなく、学習・研究・組織のレジリエンス（強靱性）を支える「信頼できる知識インフラ（trusted knowledge infrastructure）」とすべきだと主張します。その中核は、以下の 3 つの柱から構成されます。第一は「信頼できる証拠（evidence）」であり、これには情報源の

追跡可能性、検索の網羅性、撤回論文の識別、資料の来歴などが含まれます。第二は「インフラ（infrastructure）」であり、ライセンス、プライバシー、相互運用性、サービスの継続性などが含まれます。第三は「専門的能力（capability）」であり、AI リテラシー、研究手法、公平な支援、専門的判断などが含まれます。

この枠組みの下では、図書館の価値を測る単位も変える必要があります。すなわち、単発の検索、貸出、あるいはデータベース利用といった単位から、一連の学習の道のり（ラーニング・パス）、研究プロセス、そして証拠の連鎖（エビデンス・チェーン）へと移行しなければなりません。これは、Oakleaf（2010）が強調した「図書館の価値を大学の使命や成果と結びつける」という方向性と合致するものです。

情報の発見から研究ライフサイクル全体への関与へ

大学図書館の価値の再定義は、特に研究支援の面で顕著です。従来の図書館は、研究者が文献を探す段階で関与することが一般的でしたが、現代の研究において求められる支援は、研究課題の特定、システムティック・レビュー（体系的文献検索）、研究データ管理、権利・プライバシー、再現性、オープンアクセス、研究成果の普及・長期保存など、多岐にわたっています。

研究開始前には、図書館はエビデンスの把握、システムティック・レビュー、研究課題の特定、データ管理計画の策定を支援できます。研究実施中には、再現性のある検

索記録やデータ記録の作成、権利・プライバシーに関する規定の整備をサポートします。そして研究完了後には、オープンアクセス、研究データの共有、永続的識別子の付与、研究の可視性向上、長期保存を支援します。研究データサービスに関する国際的な動向を見ても、図書館の役割は単なるリソースの提供にとどまらず、研究データに関する方針策定、コンサルティング、トレーニング、さらにはデータ・ライフサイクル全体の支援へと拡大しています (Cox et al., 2017)。

したがって、研究プロセスへのより早期の関与は、単にサービス項目を増やすことではありません。それは、図書館が研究ライフサイクル全体を通じてより戦略的な価値を提供し、大学における研究の信頼性、透明性、持続可能性の維持に貢献する機会となるものです。

台湾の大学図書館における変革の実践

台湾の大学図書館の変革は単一の経路をたどるものではなく、バックエンドの業務プロセス、フロントエンドのユーザー体験、そして組織ガバナンスという各側面において同時に進行しています。次世代図書館サービスプラットフォーム (LSP) の導入から、生成 AI、研究データ管理、デジタル・ヒューマニティーズ、AI リテラシー、そして AI を活用した高度な相談サービスの展開に至るまで、台湾の大学図書館が「リソースの提供」から「プロセス支援・手法支援・知識ガバナンス」へと段階的に移行している様子がうかがえます。以

下では、プレゼンテーション資料の構成順に、プラットフォーム基盤、AI による情報探索と業務プロセス、デジタル・ヒューマニティーズの手法支援、研究データおよび AI 研究支援、そして最後に図書館員の専門的役割の変化について概説します。

(一) プラットフォームの刷新：図書館システムから、サービスと AI を支えるインフラへ

根本的な変化の一つとして、従来の統合図書館システムから次世代の図書館サービスプラットフォーム (LSP) への段階的な移行が挙げられます。Breeding (2015) は、LSP の重要な特徴として、クラウドおよびマルチテナント・アーキテクチャを採用し、紙媒体と電子リソースの管理を統合していること、さらに API や相互運用性の仕組みを通じてより広範なサービスを支援していることを挙げています。台湾ではすでに多くの国立・私立大学が Alma などの次世代プラットフォームを導入しており、大学間でのユーザーコミュニティが形成されています。その意義は単なるシステムの刷新にとどまらず、その後の業務自動化、データ分析、システム間連携、そして AI を活用したサービスを実現するための共通のデジタル基盤を提供する点にあります。つまり、プラットフォームの近代化は変革の終着点ではなく、サービスを再設計するための基盤なのです。

(二) 国立台湾大学：情報探索から AI 支援型研究探求へ

生成 AI は、台湾大学図書館の「情報探索（ディスカバリー）」サービスにも導入され始めています。国立台湾大学図書館は 2025 年、SLIM システムに「AI リサーチ・アシスタント」機能を追加しました。利用者が自然言語で研究に関する質問を入力すると、システムは関連する学術文献 5 件、AI が生成したトピックの概要、およびさらなる研究のヒントとなる質問を提示します。同時に、AI が生成した内容の確認や適切な引用を行うよう利用者に促します（国立台湾大学図書館、2025）。この事例は、図書館における情報探索が、「キーワード検索と結果リストの提示」という段階から、AI による支援を伴う研究探求へと徐々に拡大していることを示しています。ただし、その専門的価値は依然として、追跡可能な学術的情報源と利用者による内容の検証に基づいています。

（三）淡江大学：AI がフロントエンドのサービスとバックエンドの専門業務の双方に導入される

淡江大学図書館の発展は、AI がフロントエンドからバックエンドへと適用範囲を広げていくという、また別の展開のあり方を示しています。

フロントエンドでは、利用者の図書館利用を支援するカスタマーサービス・ロボットとして「小書童（リトル・ブック・コンパニオン）」が 2023 年 11 月に図書館ウェブサイト上で正式に稼働を開始しました。一方、バックエンドでは「AI 編目格格（AI カタログング・スペシャリスト）」の開発が進められ、欧文図書の日録作成業務に AI が活用されています（淡江大学覚生記

念図書館、日付なし）。こうした活用の意義は、AI が単に利用者の目に見える質疑応答インターフェースにとどまらず、図書館員の専門的な業務プロセスにも組み込まれ始めた点にあります。また、これは今後の図書館における AI トランスフォーマーション（AI 導入による変革）において、利用者向けの新しい機能だけを評価するのではなく、業務プロセスの再設計、人手による確認、そして専門的な品質管理についても同時に検討する必要があることを示唆しています。

（四）中原大学：リソースの利用からデジタル・ヒューマニティーズおよび研究手法支援へ

デジタル・スカラシップ（デジタル学術）および研究手法支援の面において、中原大学図書館は 2023 年に「DH Hub（デジタル・ヒューマニティーズ・ラボ）」を設立しました。同施設はデジタル・ヒューマニティーズ・プロジェクトを支援するとともに、テキスト・データ分析、データ可視化、GIS・空間分析、AI・デジタル創作、AR/VR、さらには手法に関するコンサルティングやワークショップといった支援を展開しています（中原大学張静愚記念図書館、日付なし）。

AI による質疑応答サービスとは異なり、この事例の核心は、図書館が単に「より多くの質問に答える」ことではなく、図書館を「研究手法のラボ（methods laboratory）」へと発展させることにあります。すなわち、単に資料を提供するだけでなく、資料を探究や知識へと変換するために必要な手法、ツール、専門的な支援、そ

して学習環境をも提供するのです。こうして図書館の役割は、「リソースへのアクセス (Resource Access)」から、さらに一歩進んで「研究手法の支援 (Methods Support)」へと移行しています。

(五) 国立陽明交通大学と国立成功大学：研究データガバナンスと AI による研究支援の強化

手法の支援から研究ライフサイクル全体へとその役割を拡大する中で、国立陽明交通大学と国立成功大学には、互いに補完し合う二つの発展の方向性が見て取れます。

国立陽明交通大学図書館は、2022 年に「NYCU Dataverse」を導入し、研究データの共有・保存・引用・探索を支援するとともに、永続的識別子 (PID) の付与、ライセンス設定、アクセス制限といった研究データ管理の仕組みを提供しています (国立陽明交通大学図書館、2024)。さらに同館は、AI リテラシーに関するリソースや活動を通じて、AI 利用における教員や研究者の監督責任と倫理的責任の重要性を強調しています (国立陽明交通大学図書館、2026)。

こうした取り組みにより、同館は単なる情報リソースの管理にとどまらず、研究データおよび「責任ある AI」のガバナンスを担う存在へと進化しています。

国立成功大学は、AI を活用したサービスや研究を主導する方向性を打ち出しています。同大学の「AI スマート・ライブラリアン・コンサルティング・システム」は、生成 AI 技術を応用し、館内の既存の各種サービスシステムと連携させたもので、2025

年 12 月に正式稼働を開始し、中国語および英語によるテキストや音声での相談対応を提供しています (国立成功大学図書館、2026a)。

研究支援の面では、「Web of Science Research Assistant」や「Scopus AI」といった生成 AI による付加機能も提供しており、学術文献の検索、要約、分析を支援しています (国立成功大学図書館、2026b)。これらを比較すると、陽明交通大学が研究データやそのガバナンスを重視しているのに対し、成功大学は AI による支援サービスや研究プロセスを重視しているという特徴があります。しかし両者に共通して言えるのは、大学図書館における研究支援が、単なる文献の提供にとどまらず、研究データガバナンスや AI を活用した研究ワークフロー (AI-enabled research workflows) へとその領域を拡大しているという点です。

(六) 個別の事例から新たな専門的役割へ：台湾大学、政治大学、台湾師範大学、中原大学の展開

上述の事例を他の大学図書館の取り組みと照らし合わせると、専門的な役割そのものが拡大していることが見て取れます。研究データおよびオープンサイエンスの分野では、国立台湾大学図書館が「研究データ管理学習ガイド」を構築し、国際的な連携プロジェクトである「Research Data Management Librarian Academy (RDMLA)」に参加しています。これは、図書館員が単なる情報リソースの支援者から「リサーチ・データ・スチュワード (Research Data Steward)」へと役割

を広げていることを示しています（国立台湾大学図書館、日付なし）。

デジタルアーカイブおよびデジタル・ヒューマニティーズの分野では、国立政治大学図書館が「羅家倫氏文書デジタル・ヒューマニティーズ研究プラットフォーム」を構築しました。同プラットフォームは、中国語の形態素解析、リンクドデータ、全文検索、情報可視化などの機能を統合し、人文学研究を支援しています（陳志銘、張鍾、徐志帆、2020）。

また、同館の研究開発グループは、デジタル・ヒューマニティーズ研究プラットフォームやデータの可視化・対話型展示モデルの運用を業務として位置づけています（国立政治大学図書館、日付なし）。

情報リテラシーおよびAIリテラシーの分野では、国立台湾師範大学図書館が2025年春の論文執筆ワークショップにおいて「アカデミック・リテラシー×生成AI」をテーマに掲げ、AIを活用した学術的執筆、学術倫理、著作権、生成されたコンテンツの検証といった課題について議論を行いました（国立台湾師範大学図書館、2025）。

「ハブ」としての役割は、従来のレファレンスや教育支援から、「デジタル・スカラーシップ・パートナー」へと発展していくことを意味します。こうした変化は、単に「新しい役割が古い役割に取って代わる」ものとして捉えるべきではありません。インタビュー、目録作成、メタデータ管理、コレクションの保存・管理、レファレンス・サービス、情報リテラシーといった業務は、依然として図書館に不可欠な専門的基盤であり続けています。真の変化とは、

既存の専門性に、研究データ、AI、デジタル・ヒューマニティーズ、研究手法、権利管理、そして分野横断的な連携能力といった要素が新たに加わることにあります。したがって、台湾の大学図書館における変革は、「AIの導入（AI adoption）」から「人間とAIの協働（human-AI collaboration）」へと段階的に移行するプロセスとして理解するのが適切でしょう。すなわち、AIがスピード、規模、自然言語による対話、統合、自動化といった機能を提供する一方で、図書館員は情報の裏付け（ソースの検証）、専門的判断、文脈や倫理的配慮、権利・プライバシーの管理、そして品質の担保を担うのです。

国際的な動向もこの方向性を裏付けています。ACRL（2023, 2024）は、AI、研究データ、オープンサイエンス、教育・学習、および専門的能力を、学術図書館に影響を及ぼす重要な課題として継続的に挙げています。また、IFLAの近年の報告書や専門書でも、AIが図書館における情報探索、業務プロセス、専門職倫理を同時に変容させていることが指摘されています。そこでは、単に技術を導入するだけでなく、信頼できる利用、情報リテラシー、そして人間中心のガバナンスの間でバランスをとることが図書館の役割とされています

（Balnaves et al., 2025; IFLA, 2026）。

台湾の事例に目を向けると、こうした国際的な潮流は、プラットフォーム、サービス、研究支援、デジタル・スカラーシップ、そして専門職としての役割といった多層的な変容の中に具体的に表れています。

六、大学図書館の再定義：3つの戦略的役割

前述の環境変化と実務経験を踏まえ、本稿では、大学図書館の将来のあり方を、相互に関連する3つの戦略的役割——「学習パートナー（Learning Partner）」「研究パートナー（Research Partner）」「機関パートナー（Institutional Partner）」——によって再定義することを提案します。これら3つの役割は、それぞれ「有能な学習者」「信頼できる研究」「強靱な大学」に対応しています。

（一）学習パートナー：AI時代のコア・リテラシーの育成

学習パートナーとしての図書館の役割は、単に学生に「図書館の利用方法」や「データベースの検索方法」を教えることにとどまるべきではありません。AI時代には、情報リテラシー、AIリテラシー、そして批判的リテラシーを統合することが求められます。それにより、学生は単にAIを使えるようになるだけでなく、情報源の判断、証拠の検証、AIの限界の理解を行い、責任を持ってAIを活用しながら、読書、執筆、探究、創造に取り組めるようになります。したがって、図書館による教育は、カリキュラム、課題、探究活動、そして読書や執筆のプロセスにより深く組み込まれるべきです。その究極の目的は、単に図書館をうまく利用できる学生を育てることではなく、「有能な学習者」を育成することにあるからです。

（二）研究パートナー：信頼できる研究の支援

図書館は研究パートナーとして、単なる情報探索にとどまらず、研究課題の設定、エビデンスの把握、体系的検索、データ管理計画、テキスト・データ分析、再現性のある研究プロセス、権利とプライバシー、オープンアクセス、データ共有、研究の影響力（インパクト）の評価、長期保存に至るまで、研究のライフサイクル全体を支援すべきです。生成AIは、架空の引用、不透明な情報源、再現性のない情報をもたらす可能性があります。したがって、図書館の価値は研究者に代わって研究を遂行することではなく、より信頼性が高く、透明性があり、再現性と持続可能性を備えた研究環境の構築を支援することにあります。

（三）機関パートナー：大学の知識インフラのガバナンス

機関パートナーとして、図書館は大学における出版物、研究データ、学位論文、機関アーカイブ、教員の研究情報を統合・連携させる役割を担います。また、権利、プライバシー、来歴（プロベナンス）、アクセス・ポリシー、長期保存、システム間の相互運用性といった側面において、ガバナンス機能を提供します。こうした取り組みにより、大学の知識は単に異なるシステムに分散したデータにとどまらず、発見・追跡・再利用が可能で、かつ持続可能な「機関の資産」へと昇華されます。生成AIが機械処理可能な高品質な知識源への依存を強める中、こうした知識インフラは、大学

が信頼性の高い AI アプリケーションを開発・展開する上で重要な基盤となります。

七、ビジョンから行動へ：大学図書館の戦略的選択

役割の再定義後、真の課題となるのは、それをいかに実践に移すかという点です。

第一に、図書館は自らの価値を可視化

(make value visible) しなければなりません。単に蔵書数、貸出回数、データベースの利用量などを報告するだけでなく、学生の学習、研究の質、そして大学の発展をどのように支援しているかを説明する必要があります。

第二に、業務プロセスへの組み込み

(embed in workflows) が求められます。図書館を独立したサービス提供部門にとどめるのではなく、カリキュラム、研究活動、そして大学における知識ガバナンスの領域へと、より深く関与していく必要があります。

第三に、共有可能な能力の構築 (build shared capacity) が必要です。専門的な業務の拡大に対応するため、図書館間連携、共同研修、専門人材の共有、そして信頼性の高いインフラの共有などを通じて、能力を強化していく必要があります。

とはいえ、大学によって目指すべき変革のモデルは一律であるべきではありません。研究型大学であれば、研究資料の整備、オープンサイエンス、AI ガバナンス、学術コミュニケーションの推進を優先するかもしれません。教育や学生を重視する大学では、学生の成功 (スチューデント・サクセ

ス)、カリキュラムの統合、デジタルスキルの向上が焦点となるでしょう。一方、職業教育型や地域密着型の大学では、産業関連情報、地域固有の知見、地域社会との連携、生涯学習などが優先事項となる可能性があります。したがって、戦略の出発点は、単に同じ技術リストを追い求めるのではなく、各機関のミッション (使命) に置くべきです。

具体的な取り組みとしては、「NOW—NEXT—TOGETHER」という段階的なアプローチが考えられます。

まず、AI、学習、研究、インフラ、そして図書館員の能力といった現状を把握・整理します。次に、価値の高いサービスをいくつか選定して試行し、日常業務に組み込みます。最後に、大学間連携を通じて、共通のガイドライン、教育モジュール、研究支援ネットワーク、共有プラットフォーム、専門能力開発の仕組みを構築していきます。

八、台湾と日本の連携：共通の課題から共有可能な能力を構築する

台湾と日本の高等教育制度は完全には一致していませんが、両国とも人口構造の変化、AI の急速な発展、図書館の専門的役割の拡大、そしてリソース (資源) の制約といった課題に直面しており、連携の余地は非常に大きいと言えます。AI や図書館員の専門性向上に関しては、AI リテラシーの実践、「責任ある AI」に関するガイドラインの策定、共同研修などを推進できます。研究支援の面では、研究データ管理、オープンサイエンス、デジタル・スカラー

シップ（デジタル技術を活用した学術活動）に関する知見を共有・交換することが可能です。知識インフラの面では、メタデータ、長期保存、システム間の相互運用性といった領域において、共通規格の策定や機関横断的な知識発見の仕組みをさらに発展させることができます。

国境を越えた連携の意義は、単に成功事例を共有することにとどまりません。各図書館が同じ問題の解決に個別にリソースを費やす重複を避けることにもあります。新たな業務が増加する一方で専門的な人材に限られている状況下において、共に学び、共に構築し、共に実験を行うことは、それ自体が大学図書館のレジリエンス（回復力・強靱性）を高めるための重要な戦略となります。

九、結語：答えが豊富になるほど、信頼はより重要になる

生成 AI は、知識の生産や情報入手のあり方を根本から変えつつあります。かつては答えを得るために多大な時間や専門知識を要することもありましたが、今や AI は、流暢かつ完全な回答をわずか数秒で生成できます。しかし、答えの数が増えたからといって、知識の質が向上するわけではありません。

AI によって答えが至る所に存在するようになった今、真に希少なものは「答え」そのものではなく、「信頼」なのかもしれません。これからの大学図書館の価値は、AI よりも速く質問に答えられるかどうかで測られるべきではなく、単にどれだけ多くの AI ツールを導入したかという点だけで変

革の指標が語られるべきでもありません。より重要なのは、知識が信頼に足るものであるための基盤を維持できるかどうかです。すなわち、情報源の追跡可能性、証拠の完全性、権利の保障、研究の再現性、知識の長期保存、そして学習者や研究者が AI を理解・判断し、責任を持って利用する能力を備えているかどうかが問われるのです。

こうした観点に立てば、未来の大学図書館は AI に取って代わられる単なる従来の「情報サービス機関」ではなく、大学にとってより重要な「知識インフラ」となり得るでしょう。学習のパートナーとして有能な学習者の育成を支援し、研究のパートナーとして信頼性の高い研究を支え、そして組織のパートナーとして大学の知的資産を管理・保存し、組織のレジリエンス（強靱性）を強化するのです。言い換えれば、AI 時代の大学図書館が目指すべき核心的な目標は、相互に関連し合う 3 つの成果——「有能な学習者（Capable Learners）」「信頼できる研究（Trustworthy Research）」「強靱な組織（Resilient Institutions）」——に集約できると言えます。

参考文献

Association of College and Research Libraries Research Planning and Review Committee. (2023). ACRL 2023 environmental scan. Association of College and Research Libraries. <https://www.ala.org/sites/default/files/acrl/content/publications/whitepapers/EnvironmentalScan2023.pdf>

ACRL Research Planning and Review Committee. (2024). 2024 top trends in academic libraries: A review of the trends and issues. *College & Research Libraries News*, 85(6), 231–246.
<https://doi.org/10.5860/crln.85.6.231>

Balnaves, E., Bultrini, L., Cox, A., & Uzwyshyn, R. (Eds.). (2025). *New horizons in artificial intelligence in libraries*. De Gruyter.

Breeding, M. (2015). Library services platforms: A maturing genre of products. *Library Technology Reports*, 51(4). 10

Cox, A. M., Kennan, M. A., Lyon, L., & Pinfield, S. (2017). Developments in research data management in academic libraries: Towards an understanding of research data service maturity. *Journal of the Association for Information Science and Technology*, 68(9), 2182–2200.
<https://doi.org/10.1002/asi.23781>

International Federation of Library Associations and Institutions. (2024). *IFLA trend report 2024: Facing the future of information with confidence*.

International Federation of Library Associations and Institutions. (2026, February 25). *Signs of the times: IFLA weak signals report 2026*.

Oakleaf, M. (2010). *The value of academic libraries: A comprehensive research review and report*. Association of College and Research Libraries.

中原大學張靜愚紀念圖書館。(無日期)。本館簡介：命名由來及沿革。
https://lib.cycu.edu.tw/?page_id=8652

教育部統計處。(無日期)。11014-02-01-01 大專校院圖書館統計：編製說明。
<https://stats.moe.gov.tw/files/others/%E7%B7%A8%E8%A3%BD%E8%AA%AA%E6%98%8E-%E5%A4%A7%E5%B0%88%E6%A0%A1%E9%99%A2.pdf>

教育部統計處。(2025)。大專校院概況統計 (113 學年度)。
<https://stats.moe.gov.tw/bookcase/Higher/114/index.html>

教育部統計處。(2026 年 8 月 13 日)。各教育階段學生數預測報告 (115–130 學年度)。
https://stats.moe.gov.tw/bookcase/St_report/115/index.html

淡江大學覺生紀念圖書館。(無日期)。緣起與現況。
<https://www.lib.tku.edu.tw/Front/AboutUs/Introduction/Originandcurrent/Page.aspx?Sn=8&id=9qI7O7aHI9M%3D>

國立成功大學圖書館。(2026a 年 1 月 26 日)。AI 智慧館員諮詢問答系統：Q 版造型票選活動。
https://www.lib.ncku.edu.tw/news/news_show_ch_news.php?news_id=6368

國立成功大學圖書館。(2026b 年 2 月 24 日)。應用 AI 工具：查詢學術論文及投稿選刊之經驗及滿意度。
https://www.lib.ncku.edu.tw/news/news_show_ch_news.php?news_id=6415

國立政治大學圖書館。(無日期)。各組聯絡資訊：研究發展組。
<https://www.lib.nccu.edu.tw/p/404-1000-312.php?Lang=zh-tw>

11

國立臺灣大學圖書館。(無日期)。研究資料管理學習指引 (Research Data

Management Learning Hub)。

https://www.lib.ntu.edu.tw/events/2022_RDMLA_class/

國立臺灣大學圖書館。(2025 年 6 月 2 日)。雲端圖書館自動化系統 (SLIM) 新增「AI 研究助理」功能。

<https://www.lib.ntu.edu.tw/node/5042>

國立臺灣師範大學圖書館。(2025)。2025 春季論文寫作工作坊：學術素養×生成式人工智慧。

[https://www.lib.ntnu.edu.tw/news.view.jsp?id=9CDB12F5-7E31-2BF7-8961-](https://www.lib.ntnu.edu.tw/news.view.jsp?id=9CDB12F5-7E31-2BF7-8961-EBDA0281B6D4)

EBDA0281B6D4

國立陽明交通大學圖書館。(2024 年 4 月 29 日)。發掘知識的力量：NYCU Dataverse。

<https://news.lib.nycu.edu.tw/researches/dataverse2024/>

國立陽明交通大學圖書館。(2026)。AI 素養世代來了！大學教學與研究的華麗轉身術。

<https://news.lib.nycu.edu.tw/researches/ai-%E7%B4%A0%E9%A4%8A%E4%B8%96%E4%BB%A3%E4%BE%86%E4%BA%86%E4%BC%81%E5%A4%A7%E5%AD%B8%E6%95%99%E5%AD%B8%E8%88%87%E7%A0%94%E7%A9%B6%E7%9A%84%E8%8F%AF%E9%BA%97%E8%BD%89%E8%BA%AB%E8%A1%93/>

陳志銘、張鐘、徐志帆。(2020)。羅家倫先生文存數位人文研究平台之建置與應用。

NCCU Academic Hub。

https://ah.lib.nccu.edu.tw/item?item_id=151920

本稿は、著者が JASPUL の国際講演で行ったプレゼンテーション「Reimagining Academic Libraries in Taiwan」を基に、ChatGPT の支援を受けて書き直したものです。論理構成、文章、引用、参考文献については、すべて著者が修正・確認を行っています。

資料について